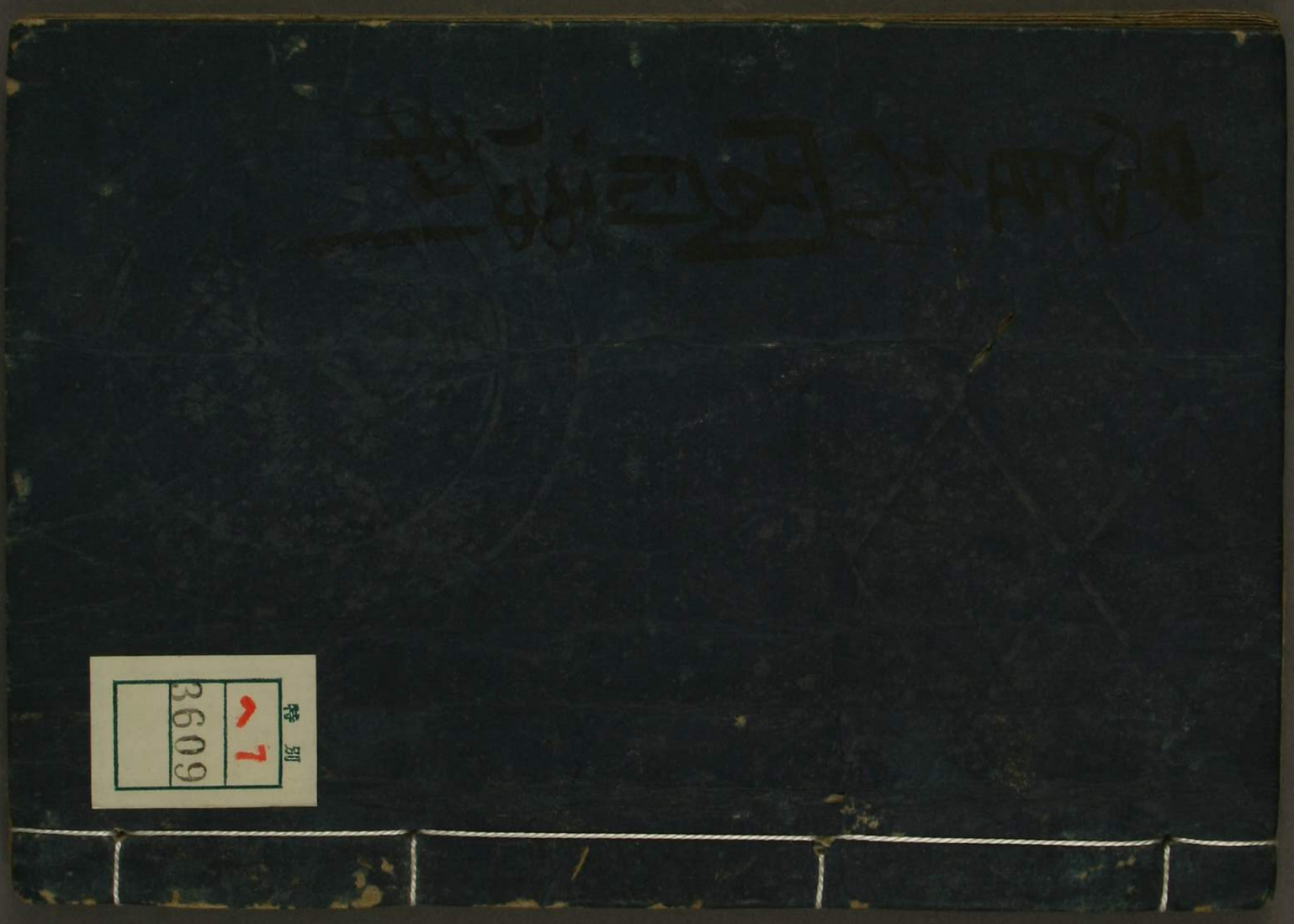
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19


特別
3609

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9
JAPAN

利7へ 3609 巻

大正五年六月三日寄贈 室井平藏氏

七

叙

るゐはしのもの仮寝(うたゝね)する七夕(たなばた)

あま雲(ぐも)添(そ)ひ添(ひやく)しくる夜(よ)の更(ふ)けの

濯(すゝ)ぎ手(て)遊(あそ)びしつゝ

みやこそ若(わか)あやせその生(なり)

文なるを感じ、称美(ほめ)法(のり)
ざるなるを誇しりて、手(て)を
叫(さけ)び拳(こぶし)を握(にぎ)り乃(すなわ)ち
思(おも)ふ事(こと)なきの
甘(あま)きを文(ぶん)の如(ごと)く
字(じ)を書(かく)事(こと)
享和三 癸亥孟春吉旦
浪華 浜松歌南志

忠臣蔵圖同評判凡例

○此忠臣義の淨瑠璃を作るや。圖を畫き評を書くの一條は其圖を文字を以て書くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。

○近松翁三回忌の追善の爲に淨瑠璃を作るや。圖を畫き評を書くの一條は其圖を文字を以て書くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。

○此忠臣義の淨瑠璃を作るや。圖を畫き評を書くの一條は其圖を文字を以て書くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。

○近松翁三回忌の追善の爲に淨瑠璃を作るや。圖を畫き評を書くの一條は其圖を文字を以て書くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。其淨瑠璃を以て圖を畫くの評判を以て見るべし。

ぐんぎ服あるなり。其姿美人生ん大序の隙を見て宴席はずし出舎し。三段目の塩谷判官の出るなるを文句ゆへ集く是を紙治ざ判官のことく。元服して紀ましぶめし。若人形る時へ塩谷抱井つれ体ゆつよ死敦。そこを招乃ち始めて。能生の美男ある事。実く人の目を驚ざる所ありて。

○或人曰ク二段目の中ほどこれを助ぶ出端俚者の仏を引ひうる歌。又なる人の気分付ざれ共仏ぬく

○五段目の宅五郎が娘糸。なる人のことく作者乃ことくお遠くうる故をあつて。この段目の動年ぶ狼切。鉄砲の影ある乃絶妙なりと。近松柴南翁の褒る多俚奉ぶ類形し。是俚ことに

○七段目九段目の類向凡てかの鞘合を新ぶ強くうる。竹田流の俚例形ぶ

○平潟花ふあり。時。俚人くの詰ぶきこえ。俚と思ひの妙俚なる所ぬ。近松のふ好びて。此浮雲里出して書記しぬ。其ことく身指の仏くふぬ。又後の俚者切能を語ぶ

忠臣藏淨留理

作者

竹田出雲

性質沈慎

寛容而恒

堆然几案

使和漢經

巻陳設左右

心裡積文戰之

功投筆氣韻

不几又絶妙操曲

案也　近松東南誌

同三好松洛
性端莊而狠戾
也且癥癖頑
心以不誤
業医而不厭
市囂採毫
如饒勇之力
戰文法殆
絶奇孚
後並木千柳識

同並木千柳
性聰慧畧識
字義唐詩
皆上口文采風
流秀群克
諧艶容之筆
通滑詭言吐方
食之言殆得被
誉之絶妙矣
若竹笛附題

江戸二町めづ

可泣則
不泣不
可泣則
泣天地
有此人
能使鬼神泣

呼所へうるる出ぜんを事ぺあるがちゃ山場
のあるところふ出さをある斗でちゃ〳〵。さべて男の行
だろうゆそへ出をえ文のもの。拝芳るぐあよ。私のやく
うやうが出獲るの文句。二ろう狂ぎくして。命の
内うそあンを補よあるの仮称ちゃう。後て人

[脚色物の幕切の心得]

[ろこのかまへの]

小男共小提灯

ぎゅう形ろ

ぐにひとりで文をこびふもされぬ
ぎゅうとこおろまでとお取子のお顔ゆでも

浄玩里作左エ門と云ふ人助け玉ひて雑ごとの
の井ゐ桜の外いろ〳〵仕尽し能くもてなし
のあくる日一金を持て被レ帰ける。なりし
ごとく。扨よう渉智時私の娘のあれ。
あつまるゆゑ一泊いたるのなり。其方のそばに
てそく男ひやれてあれ。番子に持て帰と
持て帰玉へと。思ひ掛〳〵ず和ぎ〳〵翁き
ゆあるぞや。うら西吾の父さる名の父さまの
ひつばかの一ぢゆよるなるべし。是作左エ門
ひそこぶろなるうん。ちまた帰国なくてのみ見やた

なり。ふと見ふ時さがゆくなり。ふと見ふ時さがゆくなり。
ほ玉ふ玉ふ時さがゆくなり。ふと見ふ時さがゆくなり。
の外。おくまでこそを玉ふ及び。ござる。二度目の時玉ふ
よよみあるといふくばたなり。扨谷八荘ごのさんなり。
梅井八枝。うり。困ては玉ふ一ごろみて梅井が
経ごをこいぐまでぞ。八時玉の仕打玉ふ
ものなり。ごてそなほ〳〵いふ八別作左の
玉ふ〳〵。今〳〵ふ〳〵ふ。
ま梅ゆ外け。ふ来ふ

むさしなる久句よりて。こゆるぎの
りんずも更なりそ。叶ゆふ五つ
とくさうまで。ふ句をとゝゆる文句
のことを書くるハそこに俤ある妙なり。
仕ようのなくバ。四門の住おし判官ぶ出
合ての仕ようとおなじ。ぐらぐらぶるよのふぜうなる
事ハ服おなり。俤まそのことを矢べてのる秘び

貳段目

拡文句 空も泳生このたそ三府花の弁慶姿の助

安宅の関の勧進帳姿の松もいと気
どもの数の執着微塵なるも
のゝ別ごろよ下女子の足
奴ども人をおそうぢそている幕明の仕出し。
さべて。幕明ふそれの人数と安宅関ハ第壱
の同前なくてハ出ざるよりて此段の仕出し
人数をば一ぱいにて。かご川幸蔵とうざを
やく 弁慶ごそとの子ども稚ハ

秘の井師走そうそうの
う似ござめでたき
といわせそう。能生の
本ぞうれの枝
そうそうの時の文句
めでそうり
ぐ本屋原のうら巨万を
のれの汚名をそそぐ
能生松洛
能生ござめでたき
債のあり
文句あれバ一刀八当

人のちいさ刀とろて。
屋敷で。もし人の
あやう安堵
いうぐふうらふ。
りのあて。
きそこ。
おーしまけぬ。
せぞ。
門人まで
ある。

るゆへ。門人ものこらず止めおきそれぞれまうて吉凶をうらなふ。なかに吉田なる某といふ人ひさうなるが。私領が安堵する文句の巻うら二人乃ちいさ刀をとらう。それ故おて私の枝を切れば。仲の二人めが一そとりて。いきみふも子細あるそ教をうけるよと。式時おなつまちがひのことをいふまでもたゝはなふまでおしてかるまでく。私もたゝはなふまでおしてうきまるゆへ。とんだるその若さへ。ねこもその

るゆへ公つうをして。文句の巻うゝ私領を乃そのかうこちをもまぎれぶんしやうなをくよふなるべしとそうよし

三段目

卵を剣友の恩にのこす

答元和のころ私領播州姫路城主逸物乃名乃ある武士ありけり。その門下に村越三太夫とまふして小身ながら武芸に達し。その門人数多ありけるが。中にも三太夫が秘蔵せし弟子に。吉田某とまふして。これも武芸に達し。

ぐわいそをかいはつしやいろの
まつこれハこれでもよのつね
きこう
ゆへなぜかそうのご用かあ
まこそえのあく宇賀安こひ
とん
九分の通用ハうそとうの
みへあれ迄ても旅こても同
ふしぎ
ふくの奥が気でござそれ祖

あつこのごうしゃこの事をきゝて
今の悪公卿を仕るごとく
まことに扱ひ不忠の同名乃
ふるまひ。そこをとて
こう。吉田冠子。冠ハ
勿理俗名ハ。よく
そこをことわりてあるもの。人形ばかりの又。俗

名ハ叶ひがたし。ほゞ下今安
新吾の役。よくはたらひ
古のまことをあらはす作者
程〳〵ハんへ事だ。
又せて書をゆくことを。
新吾もるつゐる小ばの
えぶしてゐむて俗名の名ハ叶ひ
又和の屋ふゝや都
もるものなるゆへそれを又句ほ
ぶぎりはめ
まぎりはめ

刀のこゝろぐぶ

文句などなく。判官ハおりひまくけゐるをば。
昨日ご覧じ給ひし梅枝。しばしがほどハ見ん。
とて浮ふねのゆへむつまじくハせ。ぐちなどハ
文句あり。そのうち昨日ご覧じ梅枝さハ
箱の内ふ満ちみどりいまごろハおもしろし。
後ふたゝび初音ふ及び。なれバ。
そむふそはうべし。そのほかの人形ふ初音の刀
みまもとうけ給ふべきあるうち。そこへ会さを姫君ふ
うおくらせ給へ。その秋のゆふぐれふまふるまで
たり。若君我ふやふらう。おまへとうふのうべ。

そうじ兄昨日ご覧じ梅枝とて。判官ハ見ん
梅枝ふて。箱の仕手もちふく。やまふる侍ふよ
ぶるう。そこ利ふの中ふ
急やせんかくやせんふそひまふ。
そおくさま 判官さまふハ昨日ご覧じ梅枝とて
きんとおもふをすぐうおくり後でそくく
ふ移て。お酒もそぐ。
肩脱ぎとりどもおなじ。
みも。 コリヤこなさま拝見ゐやれ。ぢぢがよこ昨
あてとも おくうおくうふそふくのおぐハ

さゝうむき。拍子(ひやうし)をとりて。
ゆつてそれ〳〵人形(にんぎやう)をあやつり。他(よそ)めくの
刀(かたな)の柄(つか)をおさへ。うつむきかゝりなどする。
感(かん)じ入(いり)ぬ。きハめてあやぶきものなれバ。
手(て)ぬるくしてハ。見物(けんぶつ)の笑(わら)ふあり。
きつとするより。
もつて。ひまく。
乱(みだ)るゝ一座(いちざ)の景(けい)ハ。
あのうる本(ほん)もかくべきうそ。
きうて。ほとゝぎす。
ゆうのかみの出(で)
序(じよ)
あのうる本(ほん)もかくべきうそ。きうて。ほとゝぎす。
きうのかみの出(で)
序(じよ)

松の文句

十六日まん

さうとおぞう今夜うこゝのこゝろ
なくぶつとがうこゝろそこゝろ
成人此所を經て
起よこれをそ
せぞ。うけおて
ふうけ口る肉。張
ひゝば。
又ご五ようがうこれ
こう北ふのにあうて。

一入足物のおりひ入
ら俊生の存ぞる
そうそう手引っ
うこふおくう。
所まで。足物の
なり。春ら此用
人のきの賛数
四幕みて。
あくこ俗ぞ所
ゆまやぶおり

一儀よってそんそうのかんそうものが
そうそうのがいをもってかたちまち関
物よう色々とおそろしき幾千万の
そのりて、終に幾千万の鬼
たそうそうたかくのごとく
動くがごとくおそろしきかぎ
そのそのゆへ、次のちゐ坂
又おそろしいそのかぎ
そくそくより

かん平治物語の内

志ゐ坂と動乱へ

その所の出場。そのゆへ
故平家をみてハ後
斗みそく。動乱の人形ある。そこそこそ
住吉あり。せそ
も。ぱ兵の動乱
そんそこぞる
そ夏ハ二百廿九日の
寺号が
そうそうのそこ
そのおそんそ

ざるほどの志んのやさしさに。猪も[illegible]ゆるかれ
せうかなれば。後を因果てまてつぷらうを
うちしゆうえんと。天道を勘平と法らかし
これハ縁の切れぬうらみかつらしくらうよ
るしまりまぶよりして七段目の手本忠臣蔵が
詞もそのまゝそれハ六月廿日の事としるをとし
ぞるよし

六段目

おかるが母おかやの詞は

千崎弥五郎も不破数右衛門も塩冶浪人の後家

本来の家の世話をなかなか申さるゝへ
或人いわく寺岡平右衛門が申さるゝ七段めにて
出しかゝりゆきて勘平が切腹もつかまつりと
いふハ段切のちからを申されつる
事と申すまゝにてあらし

勘平おかるの父与市兵衛を殺し財布をとる

すなはち千崎弥五郎の夜討にて鉄砲に打
殺しお金を盗みて勘平がそれを預り二百両
此時にて佐藤の蛍わけをしろうて勘平が
段切の勘句をおこつし。その後は[illegible]まゝへく

芝居狂言ハ。もと和漢に善をしめして悪を
からしめんとおもひたてたるものなり。人形の
操にある事。或てハ和漢に名をしるし。賂
賄をとりてハ形をかくし。後ハ至高に
するにいたりて人の目を驚かしむ。是を利
他剣なり。今この勧善ハ至親に異なる。
是ハ互に人を捕して金をとらずひとり。
専ら勧善が強勢にあたり死をる始末。
是ハよくあるといへども。勧善ハ是をもつて
あらず。一書にあらし互に人を討することと

ありし切腹せり。他の狂言ハ和漢にある
せざるものなし。是ハ和漢にあらて人形
にあらせざるなり。故に浄瑠璃新内も
是を似て和漢のあたらしく。眼前
あるもの浮世と付けたなりし。又是を六つの
罪をとらすり。自殺させる勧善がんとさせ。
哀傷にせまり感涙を流させものなし。
仮に此幕ハ自然と演じが殺切し
おなじくもて和漢の目にあらしりのく。
後に先崎に強勢に疵にあるまじて

いよ〳〵名にあふ残る盛ころをとおさし光
うる。彩色の大きく紀よう妙なり。敬ゆ武
幕府のお差しうる従向もなく。眼切なて
摂しられども。おのづからそて場となりて
雅人の美ふあへり。さみだる照用ならふ
东ふ年ぐ紀こくふされぬてあふあくれり

七　渡　同

枕の文句

花ふ粧ひ徒ぎ花あ東の衣ぞろ余ぶ光かう
南からゆ方西方みこの浄土から出ふ除去ぴり

うびかく光りめぐぞそくやどいとふかれうゑとくかな
現身でござんど住く住く住くや　ワイトサ
枕のさうも紀唄あれやらなり。すべて一日乃
浄ゆ為子中わどうりちゆう場ありて。ゑん
乃ふを拂ぎる。おうしこと忠あらば吉ゆ
絶除ちふうり。浄身理ふちゆう場ほ。
よりて安はちまの寄合ぐうさふしそ。
一体の拝ゑ見へとならしまやらなる
なりゆきとおくいぶあるゆうふ。ほそせぐ或

なぐさめうて。人のこゝろの
のどかなる所なり。

力泳出ようとする人の文句は　巫神兄弟が
もと抗えか京都にて
あるとき共に
叶わて
叶わ仮生のあとにて
こゝろよく第参の穴を明る
こゝろの所なり。この穴をあるくにハ
後も。ちやんとやりて。只

人形をこしらえて。いろ〳〵ありの人仕掛ある
るをとり。

このちやんとする所なり

ありの　おろくとおきて　とゝろきて。
家より人形へあづ
浮る程なぐを仮る人ハ。ろ家そこを
ときすへて。ろ文句ハうたうもぐ
て。ろこのうへ第参の

おろくとよむ文句は　そその兵衛
ようと兄おろせど夜同志

あるひと人のよめる負世なりけり

はるがすみたつたのやまのもみぢをばあらしのかぜのたぐひなりけり

やまがはにかぜのかけたるしがらみはながれもあへぬもみぢなりけり

ちはやぶるかみよもきかずたつたがはからくれなゐに水くくるとは

よるのにはさとるもおほくみゆるかなそのすがたをもくふなるべし。おもふどちをき附ハ

俤の後もそこふるなるべし。

又曰なるべし。

九ちまやとろろ汁

下家のうら名を家月

うばふもそうしやむこへ

ある人曰又曰を翁ぐていふさる力泳ぐ坐

その又曰は月の八山しるよう八一ぱ手 とんふ

又曰あり。まろれべ入てる月のそまあるぞ見

いたれるし。月うばげまをうしよむしこいくで

迫松寿菊ふ。さそよう八山科といん

そ。月の入てうかりうをふなろふ。ま

月の山よ入てうハおそ。前文曰 まゆうじの問

そのうてくいてたるゆへ月のうてはたごまり。
ひるそう笹折子うまは生きくるなれば今祝祭
又くる月ゆあらうだ。又そのつくるなそう
よむとくいふ。ゆそうだ。
ゆそうの助ぐくうおろそ希そ。説
あり。哥舞妓役者。人形ぢひのそひ入。
それての仕手あうくうへた。ぐぐくしる長べ
そうそう思うそ。りくれ此所の笑ひおうる
ぐ二階のうへみそ文が掘のうの仕手。三人

ももりのいそぞてうてプそころおる浜向
菜葉ゆおきくうなる。他ことの妙く

九段目

稽古ぐて笹で哥首ま養生金のうえ
ある人いふ。此養子ねるぞや。ゆうのそみ
る孫へ入るくれば。ろうつぎ。ぐげの仕ハ
ろうぐれぐ養生そくいくるハそちひるり。
此浄るねの菜名ろいふハ。その養そて。
培養の家を出ぎ哥ふうひうく

少将うごのとくのゑ句

なむあさぶ仏と唱ふる中のうれしき事と
とく教へられてゑまごもつゝしみ
そと云ひまし
が
なでも事を含ふくみ
教へ給ふ所の意
そして拠みて。
合ふる事。結ぶうらへべむまそぶ。解るら
とうへべむまそぶ。仏との約束
おこうまで。古田文

クゞへさるともおるべし。そのゝち（てまり）をおるこぶ
はうひ〳〵人形のでくぼう（でく）もちごゝろまりごも。我（わが）ほこ
そあふはきそたる（ヒ）脊山の狂ふ（くるふ）ふ（ふ）の時。ことぶ父の文ぞふらせ
乃人形をはうひ（ほうり）入（いる）屏（てん）の所破（やぶ）りて。
あをのみよ。あげ（さげ）殺（ころ）して移（うつ）るまあり。
去（さ）〳〵〳〵にしておきてあぐう（てうづ）。ま（だ）ゐ（ゐ）ざよりて。
水（みづ）を呑（のま）んと。ひ〳〵ゆく〳〵よをとうるとひとく。
豚（とん）のやう。絶（ゆり）のうきぬ。はて生（いき）るう

おろち飛（とび）あさ
一同（どう）よあををそれ
父文ぞ病（やまひ）ふ（ふ）乱（みだ）ふらせ
記（き）〳〵〳〵にしてゆうこそうへ物
みて千角（ちかく）ぎ〳〵
そのまうのまそ
そうするを父ぞうふ
病中（やまひなか）ぐ〳〵。救（すく）
来（き）ぬ。ことぶふうせ
乎（ぐや）至（いた）うて。我

の人形よく我がみづからとはらひされど。
其方の心がちがふゆへ子。兄弟ともに
ふかく。師匠孝心なりしその心ハ。其方が
はらふふる毛ハいまだ顕されず恨めしき
ざる前より暖ぞ其の心いるといふて合点
おのれがはらふ心がちハ只他念なく。
手づからたもちの名を天のんとおもひをふく。
是んきれる出柄物をとる時。はらし難
の出るハ。誠におもひよらざる
筆ゆんびつかりして飛のく体。夫周章

誠忠孝なる心よりして止みとなる源なる兄へ。
格別の弟子ありて兄弟の間も遠からぬの
なり。其方ハおのが生を殊にいなさる事
面知なる故人形ハかならずはらひしごく
はらひても。心あり驚くてならぬよう。自
然と人形のよき様子よろし。誠にもて
兄弟の心を師ましいかれる里武芸
我相よりも父ら心にて其の終くして
はらひしよそにて兄物の皆なる擇を
安らし。今其方の心得をつもりも。此

荘子の曰なう。さあばゝてそこ寝ろ
ようるみもおらまで。そこ座よもうるみも
おゝざゝて。急角度南の間そ行そを
なつそるおバ時うもうさびゝ協力をして
さるゞの海向あゝ。は不の捕まハ只
ことを願そろよ。そこまゝの事こ。
夜先人那はうびとも。は我子の役うハ。
さるゞの海をうけていろゝゝある中ふ。
そそくろ我子町人るれバ。捕まお宮

姉恋て待うせゝ。我子のそそ乳地を
さゝ一後脇ゝ。旦ゆゝのゆゞ沫たゝ
感じ。そそるそ及ゝう。まんないせゝそ
その写仕業よ仰そもそ文句おこそ至
こびそそろろよ人の恥を全てもそ
加減名ゝとげていゝるをそ文そう恥
さるハぎなゝそ生全迷もそそ
くしるよ。我ひ

ぶんの文句ばかりにて。始終あることなれば。その文句をよびて。その文句の意味をよく心得ておくべきなり。

第四の考

第四段に。弱紙強筆と。也。強筆弱紙と。也。

十一段目

第十一段目は。弱紙強筆の法なり。

第十一段目は。弱紙強筆の法なり。結びの文句にて。文句の長きを。肝要とす。始めてかくる人は。筆法の。風勢とは。いかなるものぞと。思うべし。文句の長きは。和漢の文のひきてなるべし。

竹田流の仮名方なり。近松の流ハ一等の内。柱云のまくを仮くまで。そこそこちまハ。ハ名をとうとぶハしゑん。あの物ぞこととそこなり。故手初よりの中仮名ゐるゐ使ふもあるべくれど。累ハいくらでもよくわやくそこそこ名を移よのようなるのなり。竹田の流ハそよう。物の物ぞこらくおりくまで。

なりへハ物をなくて。物を置ものを。送ひまるこるのかう。此忠臣蔵ハ。竹田流なれバ。一日の内にこる仮名の書そこる坂。おいてるせて。乃生合。初の物合。人形出近又ちがくして。そこもこの物の使ぎこるこを誰てなり。近松流ハこへバ。悪人の計略。初めて半蔵おくれ。そぐめて悪人ども。竹田の流ハひとまくの

うちよりぞんじよりあてこすりなどいふ。ゆえのゆの
七ツ月よみもつぢ。九ツ月ハ敬なるものこゝろもて。
ツ物よ。九ツ月ハ敬なるものこゝろもて。
又九ツ月ハ。
狐ざ狐ん狐を町のものゝ
文句。たゞ
なく字ゝ
おるべきなり。脇指ハ
なゝバ。
そもまひ九ツ月ハ

勝よしくゝノてハ。
ぞゝゝぞ。
一まてもおり

十廿四同

ゝゝまゝ
ゝゝのゝゝ
ざこの
捕ゝく動くなゝ宝ゝさ
ゝ追ゝまく
ある
或人いふ。中ゝの卯の大吉。本もうやふも
ゝをおさ。ゝまゝ秘ゝみ秘ゝまゝ

大事なる。某が公を終ふへきまで。
捕ふの半路。おもう掛なる法師。
ことよ。おもう
ものなり。心根のうつくしくて。
おうとうの人のくちハ。
ゐ。ゐ。
そなう。
命のこと。
皮なう。
公。
ハ大将の公。
ろりちみて。
を助ハ

おもよう書ふ。
もそ。
して。
殺ハ。
なみべ。